

# 令和7年度（2025年度）第1回理事会より

6月末理事会を実施し、令和6年度（2024年度）の各事業について報告がありました。

- 養成事業部：D2 養成講習会とインストラクター養成講習会を同時開催
- 啓発・ユース育成部：青少年山の家主催事業「あそびばさーる」への参画
- 広報部：広報誌「かわら版」の発行、ホームページ・SNSの運用
- 事務局：日本協会・東北ブロック協会との連絡調整、取材・記事監修対応、相談対応

## 令和6年度（2024年度）一般会計収支決算 (円)

科目	決算額	摘要
受取会費・受取助成金	457,780	会費、会員更新料、日本協会補填等
事業収益	475,170	講習会参加料等
その他収益	7,612	利息等
経常収益計	940,562	
事業費	605,378	会場費、講師謝金、材料費等
管理費	446,946	事務局維持経費、郵送料、印刷費等
経常費用計	1,052,324	



# キャンプ道



## 「植村さんの未完の夢を実現した植村直己帯広野外学校」

世界的な冒険家であった植村直己さんが1983年8月に帯広を訪れたときに、「南極犬ぞり冒険が終わったら、この日高山脈が見える十勝のどこかに野外学校を開いて、自分が体験した技術や知識を若い世代に継承していきたい」という夢を当時の帯広市長に語ったことからその夢が始まりました。しかし、それから半年後の1984年2月、厳冬のマッキンリー（デナリ）世界単独初登頂を果たした直後に消息を絶ち、帰らぬ人となってしまいました。無念でならない帯広の有志たちが「植村さんの夢を受け継いだ野外学校を作ろう」ということになり、1985年8月に『植村直己・帯広野外学校』が開校し、今年で40年を迎えました。2025年9月に帯広の北海道ホテルにて40周年の記念式典と祝賀会が開催され、日本全国から関係者が集まりました。

この野外学校のメイン行事となるのが夏のサバイバルキャンプです。野外学校基地でテントの設営、炊事、たき火、ナイフの使い方、ロープワークなど野外活動に必要な基礎を学び、実際に日高山脈の懐に入って自分の食料を自分の手で調達する「サバイバル生活」や十勝幌尻岳（1846メートル）登山にも挑戦します。このサバイバルキャンプを通して子供たちは「生きること、協力し合うこと、前向きに考えること、食料は簡単に手に入らないこと、命をいただくということ、当たり前が当たり前でないこと、決してあきらめないこと」などたくさんの気づきを持つことが出来ます。これらのウエムラスピリッツ（植村さんの心）の原点は植村さんが学生時代に過ごした明治大学山岳部での経験が大きかったのではないかと思います。長期の山行を行うときは、食糧や燃料はしっかりと担ぎ、決して楽をしません。山には優劣や、簡単も難しいもなく、高さやスケールこそ違っても山は変わりません。体力がある人にもない人にも山のきつさは変わらないし、装備がないからと言って吹きつける風雨や吹雪は手加減してくれるわけではありません。山は誰にでも平等です。だから自分が強くなるしかありませんし、自分を過信することなく、準備を怠らず、あきらめずに地道に努力していくことが植村イズムの神髄ではないかと僕は考えます。AIに聞くとすぐに解決できて、何でも合理的、効率的に考えることがもてはやされる時代だからこそ、自分で答えを探していく自然体験が大切なのではないだろうかと思えます。

植村直己帯広野外学校 高柳 昌央

## 役員改選について

令和7年度（2025年度）から令和9年度（2027年度） 2年間

会長	秋葉 聡志
副会長	諫山 邦子
常任理事(事務局)	山田 啓貴
常任理事(養成事業部)	下川原 清貴
常任理事(啓発・ユース育成部)	山田 憲克
常任理事(広報活動部)	長江 集子
理事	小野 俊英
理事	片岡 裕之
理事	松浦 賢一
理事	二杉 寿志
理事	安原 政志
理事	坂谷 充
監事	斉藤 隆弘
監事	志賀 和行

## かわら版バックナンバー

ご存知でしたでしょうか？

当協会の広報誌「かわら版」のバックナンバーを閲覧することができます！



ぜひ、Web ページよりご覧ください！

### 北海道キャンプ協会事務局

〒005-0862

北海道札幌市南区滝野 106 番地

NPO法人ネイチャープログラムデザイン内

TEL&FAX 011-596-9170

メール hokkaido@camping.or.jp

URL https://hokkaidocamp.com/

発行：北海道キャンプ協会広報部

編集：長江 集子

Web ページ



Facebook



## 日本キャンプ協会社員総会・都道府県キャンプ協会研修会 報告

日本キャンプ協会の定時社員総会が6月14日(土)、国立オリンピック記念青少年総合センターで実施され、北海道からは諫山副会長と二杉理事が出席いたしました。

翌15日(日)の研修会では、都道府県協会の事務局を中心とした担当役員が全国から集まり、「指導者のための倫理ガイドライン」の普及をテーマに議論しました。

### 「キャンプ指導者のための倫理ガイドライン」

日本キャンプ協会から、キャンプ指導者をはじめキャンプに関わるすべての方々に向けた冊子『キャンプ指導者のための倫理ガイドライン』が発行されました。

中期事業計画「ビジョン2025」では、その目標として「多くの人々が豊かな自然や身近な日常で、多種多様なキャンプを安全に、楽しく行うことができる状況をつくり出す」ことを掲げています。その実現のためには、キャンプの実践を支援する人や組織を整備する必要があります。キャンプ指導者は、キャンプで人と人、人と自然、人と社会をつなぐ上で重要な役割を担うことになります。

本ガイドラインではそうしたキャンプの現場において、キャンプ指導者が倫理的・社会的責任を果たすための心構えや問題への対応等について紹介しています。

倫理ガイドライン



#### ■冊子概要

##### ▶キャンプ指導者の心得

キャンプ指導者とキャンパーの信頼関係の構築  
/差別やハラスメントの防止/自然環境への配慮  
/キャンプと現代社会

##### ▶倫理的な問題への対応

指導者の影響力/倫理的な問題を生じさせ得る構造的要因  
/アンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み・偏見)への  
気づきと対処/キャンプ指導者とキャンパーの適切な距離感  
(プロフェッショナル・バウンダリー)を育む

## キャンプディレクター2級養成講習会のお知らせ

北海道では2年に1度、D2養成講習会を開催しております。今年度、北海道での開催はありませんが、他地域での開催が予定されておりますので、ぜひご検討ください。

D2 養成講習会ご案内

-受講要件-

- キャンプインストラクター資格を保有していること
- キャンプインストラクター資格取得後(認定日以降)  
アウトドア活動参加経験2回以上と、1泊以上のキャンプ指導経験1回以上



## ひとり親家庭を対象とした野あそびキャンプ 報告

この度、北海道キャンプ協会主催のもと、一般財団法人おたる自然の村公社およびNPO法人こども共育サポートセンターと共催し、「ひとり親家庭を対象とした野あそびキャンプ」を開催いたしました。

募集に際しては、NPO法人ひとり親とこどもふぉーらむ北海道様や札幌市内のこども食堂様にもご協力をいただき、5組のご家庭が参加しました。

開催日は8月16日からの1泊、夏の暑い日差しの中での活動となりました。プログラムの内容は参加者同士の自然な交流と発見の時間を大切にしたいという思いから「ゆったりとした時間」を重視して構成しております。メインとなったのは火おこし体験、焚き火カレー作り、そして保護者の方々との焚き火交流会です。

キャンプが始まってすぐに、思わぬ嬉しいサプライズがありました！予定になかった畑の収穫体験をさせていただいたのです。採れたてのズッキーニなどをその場でカレーの食材として使うことで、子どもたちは自分たちで食べるものを作る喜びと、畑の恵みを五感で体験することが出来ました。

初めての火おこしは、みんな火をつけるのに四苦八苦していましたが、諦めずに何度もチャレンジしている姿が本当に素晴らしかったです。

日が暮れると、「夜の探検に行きたい！」という子どもたちの声が上がりました。幸い、プログラムにはゆとりがあったので、さっそく探検に出かけることにしました。展望台へ向かう散策路を進むと、目の前には北海道三大夜景の一つ、小樽の港の美しい夜景が広がっています。さらに、運良く対岸では花火大会が開催されており、予想外の奇跡的な巡り合せとなりました。夜空を彩る花火に、子どもも大人も時間を忘れ、全員で感動を共有することができました。

2日目の散策中にはアオダイショウに遭遇しました！初めての貴重な体験に「へびってこんな感触なの?!」と、驚きに満ちた表情をしていました。

1泊2日、参加されたご家族にとって、思い出に残る体験を提供することができました。

ご協力いただいた全ての方々へ心より感謝申し上げます。これからも様々な団体との協働を通じて、活動の幅を広げてまいりたいと思います。

長江 孝 (NPO法人こども共育サポートセンター)



## 参加者の声

• お忙しい中、このような機会を与您えただき本当にありがとうございました。子どもが集団行動から外れることが何度かあり、その時にも温かくサポートしてくださったりで助かりましたし、何より普段私がしてあげられないこと等、丁寧に教えて下さったりキャンプ体験以外の経験もさせていただき、参加してよかったです。

• 兄弟も従兄弟もおらず、幼稚園以外でなかなか同じ年代くらいの子もたちと接する機会を与えられないのを何とか思っていました。今回他のお子さんたちと一緒に交流させてあげられて私自身嬉しかったです。帰宅してからは祖父母に何回も火起こし体験の話を説明しておりました。また、スタッフの方が恋しい様で、全員の名前をブツブツ呟いています。今回はこの様な機会をいただきありがとうございました。また機会があれば参加させていただきたいです。